

＜大賞＞

◆映像部門 『在宅死 “死に際の医療” 200 日の記録』
NHK エンタープライズ 下村幸子さん

どうすれば、人は、住みなれた家で安らかに死を迎えられるのか。埼玉県新座市の堀ノ内病院在宅医療チームに密着した記録。80歳の医師、小堀鷗一郎さんは、もともとは大学病院のエリート外科医だった。定年後、60代後半で在宅医療に関わるようになる。自ら軽自動車のハンドルを握って一軒一軒まわる。全盲の娘さんが、末期癌の父親を最期まで家で看取る映像は、過酷な条件のもとでも、患者が望む穏やかな看取りができるという希望と、それは何故かを考えさせる。100分の番組にもかかわらず、6月から9月までの3ヶ月で5回放送され、患者だけでなく、医療従事者からも、現場を映像で知ることができて非常に勉強になったとの声が寄せられている。



◆新聞・雑誌部門 『早川一光 聞き書き こんなはずじゃなかった』
早川さくらさん・京都新聞社写真部 松村和彦さん

『わらし医者京日記』で知られる在宅医療のパイオニアで、呆け老人を抱える家族の会（現・認知症の人と家族の会）の生みの親、早川一光さん。その最期の日々の様々な思いの聞き書きは、こんな、京言葉で始まる。

「おーい、ちょっと聞いてえな」／「なんですねん、先生」
「わし、90歳にして、病気になってしもた」

筆者は、実の娘でもあるフリーランスライター。「新聞記者には書けない素晴らしい聞き書き」「松村和彦カメラマンの写真も感動的」と称賛された。連載が終わった2日後の6月2日、94歳で旅立った早川さんの最後の言葉は、「ほな、いくな」



◆メディアミックス部門 『障がいを持つ息子へ 息子よ。そのまま、いい』
神戸金史さん（RKB 毎日放送 東京報道部）

46人が殺傷された津久井やまゆり園事件。「障害者がいなくなればいいと思った」という供述がくりかえし報じられた。耐えられなくなった神戸さんは、フェイスブックに書き込んだ。「私は思うのです／長男がもし、障害をもっていなければ／私たちはもっと楽に暮らしていただかかもしれない」と始まり、「あなたが生まれてきてくれてよかった」と結ばれた1000文字は急激に拡散し、これを採り上げたニュースの動画は1万3000回以上シェアされた。他にも数多くのラジオや新聞が紹介し、英語と中国語にも訳された。乞われて、父・母・弟が初めて合作した本『障害を持つ息子へ 息子よ。そのまま、いい』（ブックマン社）も出版。さらに、詩に曲が付いたのを契機に、障害のある家族の写真を募集、「わが子たちには名も顔もある」というメッセージの動画を制作、ユーチューブで公開した。拘留所の植松被告と4回面会し、テレビやラジオ、雑誌などで伝えている。また、以前に自分の家族を撮った番組『うちの子 自閉症という障害を持って』をニュースサイト上で無料公開したことで、植松被告や多くの人々が知的障害や自閉症に抱いている先入観が壊されている。これまでにないメディア横断的な活動に、協会賞に新たな部門が設けられることになった。



<優秀賞>

◇書籍部門 『「孤独」は消せる。』(サンマーク出版)
ロボットコミュニケーター 吉藤健太郎さん

ロボットというと、重いものを持ち上げたり、命令通りに危険なところに入っていったり、あるいは癒し系というイメージがあるが、著者が開発した「分身ロボット」は発想がまったく違う。たとえば、この本に登場する番田雄太さんは、4歳のとき交通事故にあって人工呼吸器で命をつなく身、盛岡に住んでいる。ところが、彼の「分身」オリヒメが東京のオフィスに“出勤”し、会議に出席し、秘書役までつとめる。東京の大学にも参加する。番田さんは本書が出版された半年後に亡くなってしまったが、彼が提案した、ロボットに腕をつけたりして表情ゆたかにするアイデアは生きている。

本書は、開発の歴史でありながら、自伝でもあるのが興味深い。小学校5年から中学まで不登校、引きこもりを経験。自分自身の「場」を持ってないことによる強烈な孤独感は、その後の活動の根底を形作っているようだ。

今日の国際的な成功は、社会の多様性の大切さをも示唆している。



◇映像部門 『がんと闘う子どもたち～小さなレモネード屋さん～』
山陽放送報道部 米澤秀敏さん
RSK 地域スペシャル メッセージ取材班

3歳で脳腫瘍を患い回復した小学生、榮島四郎くんが、「小児がんについて、もっと知ってほしい。研究費も集めたい」と、夏休みを利用し、友人と開いた「レモネードスタンド」を縦糸に、小児がんをとりまくさまざまな課題が、広く、分かりやすく紹介される。

日本では毎年 2000 人あまりが小児がんと診断され、こどもの病死の原因の 1 位になっている。にもかかわらず専門医が圧倒的に足りないこと。命をとりとめても、長い人生を後遺症とむきあわなければならないこと……。

四郎くんの手紙を受け取ったアナウンサーでもある記者が、少年の使命感に触発されて、取材から編集、ナレーションをつとめ、この番組完成までに、ニュース特集としても放送して、反響が広がった。放送後、四郎くんが発案した絵本『しろさんのレモネード屋さん』(吉備人出版)が出版され、初版3000部を完売し、増刷。



◇新聞・雑誌部門 『医療ルネサンス「いのちの値段」』
読売新聞東京本社 医療部「いのちの値段」取材班

国民の医療と日々の暮らしを、「値段」という切り口で描いた意欲的な連載。本庶佑さんのノーベル賞受賞でも脚光を浴びた高価な癌治療薬〈オプジーボ〉に加え、〈透析と人生〉〈精神疾患〉〈人生の最終章〉〈対話のカタチ〉〈地域をつなぐ〉など 11 のテーマを、5つずつの物語で描いている。すべての物語が、患者や家族の「下から目線」を徹底しつつ、必要なデータや視点も忘れていない。カット写真も重視して、内容を象徴的に示している。



「医療ルネサンスはこのような連載記事の老舗で、取材対象に肉薄し、問題点を抉り出していくスキルには他の追随を許さないものがある」「いのちの値段に関わる記事が、これだけまとまると病根のあまりの大きさに圧倒され、激しく心を揺さぶられる」と高く評価された。

<特別賞>

◇書籍部門 『大学病院の奈落』 (講談社)

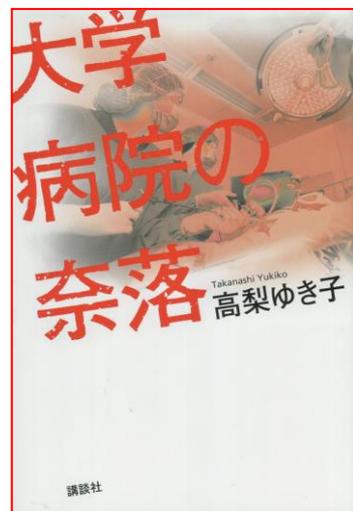
高梨ゆき子さん(読売新聞東京本社 医療部)

群馬大学病院で、同じ医師が執刀した腹腔鏡手術のあと、8人の患者が亡くなった。有効性が確立されておらず、保険診療に認められていない術式なのに、倫理審査も受けず、患者にその事実を告げることもなく、手術は行われた。「穏やかでまじめ」と周囲から評される医師がなぜ暴走したのか。一連のトクダネは新聞協会賞を受けた。その著者が、新聞では伝えきれなかったことを緻密な取材のもとで練り上げたのが本書だ。

事故がおきると個人の責任にする病院やメディアが多い。ところが、本書では、執刀した当事者をあえて匿名にし、その理由を、「一連の出来事が個別の問題として矮小化されてはならないと考えた。この本を通じて群馬大学病院の事件が残した教訓について理解し、よりよい医療とはどういうものか考えてみる方がひとりでも増えるとしたら大変嬉しい」と語っている。

本書は、今なお残る医療機関の封建制、密室性にも焦点をあてている。

医療者が、自らの組織で、このような事故を起こさないために学ぶ教科書にもなりうる本だ。



◇書籍部門 『地図から消される街』 (講談社現代新書)

青木美希さん(朝日新聞東京本社 社会部)

福島第一原発事故から7年以上が過ぎ、人々の関心が薄れる中で、避難者は支援が打ち切れ、震災関連自殺は今年7月時点で215人にのぼっている。震災当初から取材を続けてきた筆者が「避難者うつ」の実態をつぶさに描いたルポルタージュ。

官僚たちに「避難者は酒とパチンコばかりだ」「いつまで私たちは敏感な人たちに付き合わなければならないんですか」と言われたことに対し、「どうしたら伝わるのかを考えながら書いた。官僚や政治家、県庁が「避難者うつ」の実態を認識してくれなければ、現状は変わらないと思った」からだという。出版後、そのような官僚の1人に本を渡そうとしたら、すでに買って読んでおり、「避難者は酒とパチンコばかりだと思っていたけれども、違うと分かった。こんなに大変な暮らしを強いられているとは知らなかった。ありがとう」といわれ、驚きと嬉しさで、しばらく言葉がなかった、という。

本書は5刷を重ねている。避難者が困難に陥る中で報道が減っている現状が彼らをより苦しめている。そのことへのメディアとしての反省を込めて問いかけていることも評価された。

地図から消される街

3.11後の「言ってはいけない真実」

青木美希



なぜ帰らないのか
何が起きているのか!

帰還率「4.3%」の衝撃
知られざる母子避難者の自死
不正と中抜きだらけの「手抜き除染」
新聞協会賞3度受賞
震災直後から取材を続ける女性記者が見た現実とは

講談社現代新書